

アレキシサイミア傾向者の表情認知に関する実験的検討

—感情語のラベリングと描写の特徴に注目して—

上田 和希 (広国大大学院) *1 工藤 晋平 (広国大) *2 岩田 昇 (広国大) *2

〔はじめに〕

アレキシサイミア (alexithymia) 概念は、Sifneos (1973) が提唱した概念であり、さまざまな精神疾患との関連が認められる、感情処理と感情制御能力に障害を抱える性格特性として認知されている。

アレキシサイミア構成概念の妥当化研究の一環として、アレキシサイミアにおける感情情報処理の問題について、外的な刺激に表情認知課題を用いた研究が散見される。結果が特に顕著であった研究では、Izard (1971) の表情写真 9 つにおける「恥」と「嫌悪」以外の感情価で、アレキシサイミア傾向者 (High-Alex) の表情認知能力が、非アレキシサイミア傾向者 (Low-Alex) に比べ、低いことを報告した (Parker et al., 1993)。しかしながら、その後の海外における追研究 (Mann et al., 1994; Pandey & Mandal., 1997) では一貫した結果が得られておらず、アレキシサイミアと表情認知能力の関連が明らかにされたとは言いがたい。

一方、日本における当該テーマに関する報告では、アレキシサイミアと表情認知能力の関連を見出していない (馬場ら, 2002 ; 小塚, 2005)。その原因として、先行研究では感情価が予め被験者に提示された状態であったために、High-Alex にとって、比較的容易に回答できるものであった可能性が考えられること、また、日本における先行研究では、用いられた表情刺激が、欧米人の表情刺激であったため、結果が顕著に示されなかった可能性が考えられた。

そこで、本研究では日本人の表情刺激を用い、先行研究の評定方法に加え、感情価を提示しない評定方法 (自由記述課題) を用いて、アレキシサイミアと表情認知の関連について検討することを主目的とした。

〔方法〕

1. 実験対象者の選定

- 1) 対象者 : H 県内の私立大学に在籍中の学部生 221 名である。その内、データに欠損のある者と回答に偏りが認められた者を除外し、最終的に 204 名 (平均年齢 20.2 ± 1.1 歳, 年齢幅 18 ~ 28 歳) を分析の対象とした。内訳は、男性 115 名 (平均年齢 20.2 ± 0.9 歳, 年齢幅 19 ~ 23 歳)、女性 89 名 (平均年齢 20.2 ± 1.4 歳, 年齢幅 18 ~ 28) であった。
- 2) 調査票 : 日本語版 20-items Toronto Alexithymia Scale (TAS-20 ; 小牧ら, 2003) を、小牧の許可を得て使用した。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の 5 件法である。得点は単純加算で、最低得点が 20 点、最高得点が 100 点である。TAS-20 合計得点を 4 分位法で分け、63 点以上を High-Alex、47 点以下を Low-Alex とした。

*1 広島国際大学大学院総合人間科学研究科臨床心理学専攻

*2 広島国際大学心理科学部臨床心理学科

3) 手続き：授業終了後に質問紙を配布し、休み時間に回答を求め、その場で回収した。

2. 実験

1) 対象者：質問紙に回答した者の中から、協力同意の得られた 27 名 (High-Alex 12 名、Low-Alex 15 名) を実験の対象者とした。その内、欠損の認められたデータを除き、最終的に High-Alex 11 名 (男性 6 名、女性 5 名)、Low-Alex 12 名 (男性 5 名、女性 7 名) を分析の対象とした。

2) 表情刺激：ATR 顔表情画像データベース (DB99) を使用した。

「喜び」「悲しみ」「驚き」「怒り」「嫌悪」「恐れ」「軽蔑」を表出した表情写真に加え、いくつかの感情がブレンドされた表情写真 (「曖昧」) のそれぞれにつき男女 1 枚ずつを使用した。写真の特性による回答の偏りを考慮し、8 つの感情価の内 1 つを表出した写真を、感情価毎に 1 枚ずつ、計 8 枚で構成された写真群を 2 セット用意し、実験参加者間でカウンターバランスをとった。

3) 実験セッティング：実験は 1~4 名の小集団で行った。写真の提示にはプロジェクターを使用し、後方から実験参加者の約 2 メートル先に投影した。スクリーンの大きさは、100 インチであった。写真刺激の再生には、Microsoft PowerPoint を用いた。また、評定時間の測定のため、デジタルビデオによる実験風景の録画を行った。なお、デジタルビデオの撮影は実験協力者の承諾を得て行い、実験参加者の視界に入らない位置にセットした。

4) 手続き：実験参加者に表情写真を提示し、写真の人が表出していると思われる感情について、3 つの評定方法への回答を求めた。実験 1 として、自由記述課題 (写真提示時間 60 秒) において、「一番はっきりしている感情」について一言で記述し、その感情をどの程度表しているか「ほとんど表れていない」～「とても表れている」 (5 件法) のいずれかを○で囲んだ。そして、「その他に表している感情」があれば、同様の手続きで回答した後、その感情の「詳しい説明」 (回答時間 30 分) を記述し、回答時間内に全ての回答が終われば、休憩してもよいこととした。実験 2 として、リッカート評定 (写真提示時間 45 秒。強制選択課題への評定も含む。) において、「喜び」「悲しみ」「驚き」「怒り」「嫌悪」「恐れ」「軽蔑」のそれぞれについて「ほとんど表れていない」～「とても表れている」 (8 件法) の当てはまると思うところを○で囲んだ。そして、強制選択課題では、「喜び」「悲しみ」「驚き」「怒り」「嫌悪」「恐れ」「軽蔑」のいずれか 1 つを選んだ。

[結果と考察]

先行研究を参考に、リッカート評定では、表情認知の正確さ得点 (正答感情価/その他の感情価×100) を算出し、High-Alex と Low-Alex に差が認められるか、対応のない t 検定を用いて検討を行った結果、有意な差は認められなかった。

強制選択課題については、各感情価における High-Alex と Low-Alex の正選択者数と誤選択者数に差が認められるか、クロス集計表を用い、Fisher の直接確率法による検討を行なった結果、有意な差は認められなかった。

自由記述課題については、記述内容を、筆者が作成したコーディング表と、「感情表現辞典」 (中村, 1993) を用いた 2 通りのコーディングを行った。それぞれのコーディング結果について

て、High-Alex と Low-Alex の正選択者数と誤選択者数に差が認められるか、クロス集計表を用い、Fisher の直接確率法による検討を行なった結果、有意な差は認められなかった。この結果は日本やインドにおける先行結果（Pandey & Mandal., 1997;馬場ら, 2002; 小塚, 2005）と一致しており、これらの国におけるアレキシサイミアと表情認知能力には関連が無い可能性が考えられた。

本研究で High-Alex に特徴的であったのは、「驚き」の写真に対する、リッカート評定と強制選択課題の両方の評定に要した時間（感情情報処理）が、Low-Alex に比べ、有意に長かったことである（Table 1）。この結果は、先行研究と類似するものであり、アレキシサイミアの感情情報処理の問題を示していると考えられたが、より特徴が表れると予想した自由記述課題においては否定されたため、測定誤差である可能性も考えられた。また、自由記述課題における、各感情価と全体における反応の幅（いくつの感情を読み取ったか;カテゴリー）についても検討をおこなったが、High-Alex と Low-Alex の読み取った感情のカテゴリーに有意な差は認められなかった。（Table 2, Table3）。

Table1 各群におけるリッカート・強制選択課題の評定時間

各写真における感情価	High-Alex (N=11)		Low-Alex (N=12)		W
	平均	(SD)	平均	(SD)	
喜び	22.45	(6.92)	20.17	(7.40)	130.00
軽蔑	30.55	(8.45)	28.67	(5.58)	135.00
悲しみ	24.82	(9.63)	24.92	(7.76)	129.50
恐れ	32.27	(8.30)	29.75	(9.30)	130.50
怒り	23.91	(6.60)	23.83	(8.01)	137.50
驚き	25.55	(8.04)	20.17	(7.21)	109.50 *
嫌悪	29.00	(7.13)	25.00	(7.14)	123.00
曖昧	26.64	(9.62)	17.17	(9.04)	128.50

*p<.05, WはWilcoxonの順位和検定による出力結果

Table2 自由記述における使用カテゴリー数 —カテゴリー分類表—

各写真における感情価	感情名 *1	High-Alex群		Low-Alex群		W
		平均	SD	平均	SD	
幸福	喜	1.8	(1.0)	1.6	(0.7)	137.5
軽蔑		2.6	(0.9)	2.6	(0.8)	122.5
悲しみ	哀	2.6	(0.8)	2.6	(0.5)	113.5
恐れ	怖	2.5	(0.9)	2.3	(0.9)	137.0
怒り	怒	2.2	(0.8)	2.7	(1.0)	111.0
驚き	驚	2.1	(0.8)	1.9	(0.8)	138.0
嫌悪	厭	2.3	(0.9)	2.4	(0.7)	126.0
曖昧		2.6	(0.9)	1.9	(0.8)	114.5
合計		18.6	(4.1)	16.8	(3.0)	126.0

*1 感情名は感情表現辞典による。WはWilcoxonの順位和検定による出力結果

Table3 自由記述における使用カテゴリー数 —感情表現辞典—

各写真における感情価	感情名 *1	High-Alex群 (N=11)		Low-Alex群 (N=12)		W
		平均	SD	平均	SD	
幸福	喜	1.7	(0.1)	1.6	(0.7)	140.5
軽蔑		2.6	(0.9)	2.0	(0.6)	117.0
悲しみ	哀	2.4	(0.9)	2.0	(0.9)	130.0
恐れ	怖	2.3	(0.8)	2.2	(0.9)	139.5
怒り	怒	2.1	(0.9)	2.4	(0.9)	116.0
驚き	驚	2.1	(0.8)	2.0	(0.9)	142.0
嫌悪	厭	2.4	(1.0)	2.3	(0.5)	130.0
曖昧		2.6	(0.9)	2.0	(0.7)	118.5
合計		18.2	(4.4)	16.5	(3.0)	128.5

*1 感情名は感情表現辞典による。WはWilcoxonの順位和検定による出力結果

[まとめ]

本研究では、アレキシサイミア傾向者と非アレキシサイミア傾向者との間に、明確な表情認知能力（静的な写真刺激）の相違は認められなかった。しかしながら、概念的には、感情認識能力に何らかの相違が認められることが想定されており、スクリーニングに用いた TAS-20 の妥当性の問題も含めて、今後さらに検討していく予定である。

また、自由記述課題における、感情の「詳しい説明」において、アレキシサイミアの特徴と考えられる記述がいくつか見受けられたため、今後分析を追加する予定である。